［資料紹介］

令和元年度・二年度寄附刀剣

西垣江利子

令和元年度および二年度に岡山県立博物館が寄贈を受けた刀剣類について、その一部を『研究報告』第41号で紹介した。本稿では、前回に引き続いて次表の資料の概要を報告し、岡山県立博物館リニューアルオープン後の展示公開に備える。

No.	種類	名称	時代
1	短刀	備州長船祐定／永正六年八月日	室町時代後期（1509年）
2	脇指	（菊紋）日置越前守源［以下切］	江戸時代初期
3	脇指	近江大掾藤原忠廣	江戸時代初期

《参考文献》
飯村 嘉章『新刀大鑑』株式会社刀剣美術工芸社　一九七六年
『肥前刀大鑑』財団法人日本美術刀剣保存協会 一九七九年
『長船町史 刀剣編図録』長船町　一九九八年
岡崎 譲『日本刀備前大観』株式会社福武書店　一九八〇年
常石 英明『日本刀の研究と鑑賞（古刀編）』㈱金園社 二〇一六年
常石 英明『日本刀の研究と鑑賞（新刀編）』㈱金園社 二〇一六年

本稿に掲載の画像は、全てスペアタイムスタジオ 中村 慧氏の撮像によるものである。

本稿執筆に際し、片山 光一氏、中村 慧氏、森 英樹氏より資料の提供やご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

No.1　短刀　備州長船祐定／永正六年八月日

［法量］刃長２９・６５㎝、反り　０・４２㎝、元幅　２・８２㎝、元重ね０・６６㎝

［形状］平造、庵棟、身幅やや広く、やや寸延び、浅く反る。

［地鉄］板目肌が流れる。

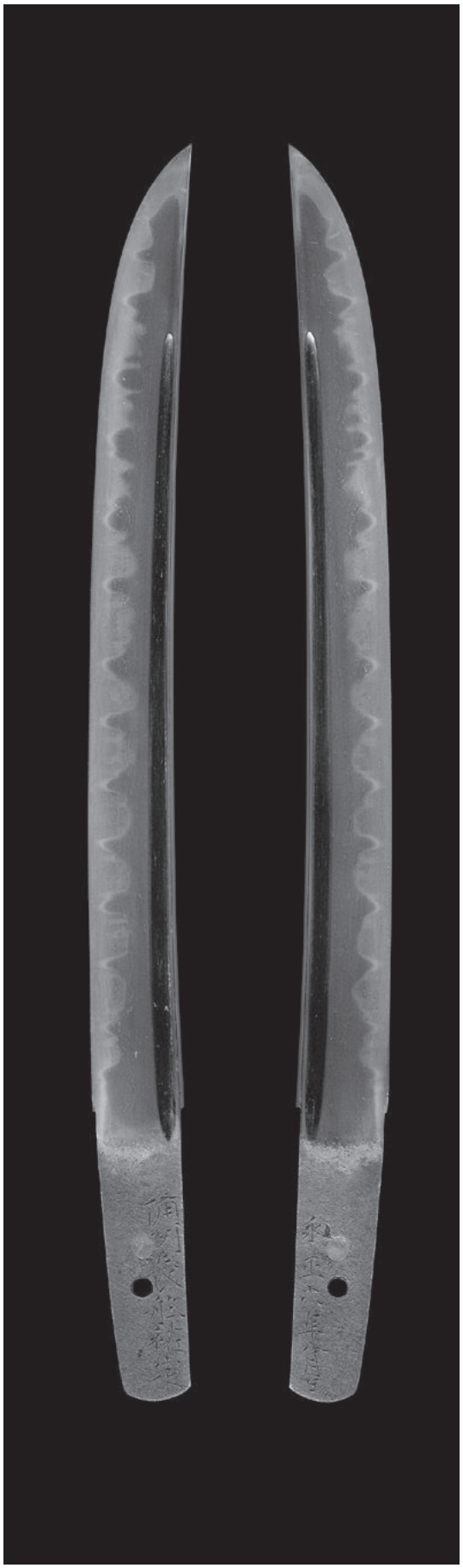
［刃文］匂出来基調に小沸がつき砂流しがかかり、やや腰開きのリズミカルな大互の目に丁子が混じり、足が長く入る。

［帽子］表小丸裏尖りごころに表裏やや深く返り終点棟に寄る。

［茎］生ぶ、角棟、浅い栗尻、浅い勝手下り鑢、目釘孔二（うち一は鉛埋）。区から茎尻まで幅と重ねが落ちない特徴的な形状。

室町末期のいわゆる末備前の時代に祐定を名乗った刀工は数多く、もっとも多く現存するのが祐定の作である。中でも、与三左衛門尉祐定、源兵衛尉祐定、彦兵衛尉祐定といった俗名を冠する三工が著名であり、技量が優れている。

本作は、永正六年の年紀がある祐定の作である。ふくらがわずかに枯れ、茎先が張る末備前風の特徴を示しながら、反りがつき、左右が均等に近い茎尻の形状はより古い時代の特徴にもみえる。鍛えは板目にところどころ流れて柾目となり、細かく地景が入り変化が多く、刃文は小沸をつけて匂口が明るい。銘に俗名がないため個人の特定は難しいが、出来栄えからみて上工による作と考えられる。



No.2　脇指　（菊紋）日置越前守源［以下切］

［法量］　刃長　51・61㎝、反り　1・15㎝、元幅　3・05㎝、元重ね　0・63㎝

［形状］　鎬造、庵棟、身幅やや広く、中鋒延びる。

［地鉄］　小板目が詰み、乱映り立ち、地沸が厚くつく。

［刃文］　匂主体の丁子乱れに所々小沸がつき、足・葉しきりに入る。

［帽子］　浅く湾れて小丸に返る。

［彫物］　表裏丸止めの棒樋。

［茎］　磨上げ、角棟、切鑢、目釘孔二。

茎が磨上げられ刀工銘の一部が欠損しているが、菊紋とともに独特の隷書風の書体で日置越前守と切られていることから、江戸石堂派の宗弘の作と考えられる。

石堂派は、近江国蒲生郡石塔村（現在の滋賀県東近江市石塔町）にある石塔寺近隣に住したことからおこった名称である。備前福岡一文字の系統をひくといわれ、江戸・京都・紀州・大坂など各地に移住して備前伝を鍛えている。天正年間の大洪水によって衰退した備前国の刀工に代わって、新刀期の備前伝は石堂一派によるものが主流となった。

本作は、よく詰んだ板目肌に乱れ映りや地沸が現れた地鉄、匂出来の丁子乱れの刃文など、福岡一文字の作に則っていることが看取される。

No.3　脇指　近江大掾藤原忠廣

［法量］　刃長　46・44㎝、反り　1・34㎝、元幅　2・97㎝、元重ね　0・75㎝

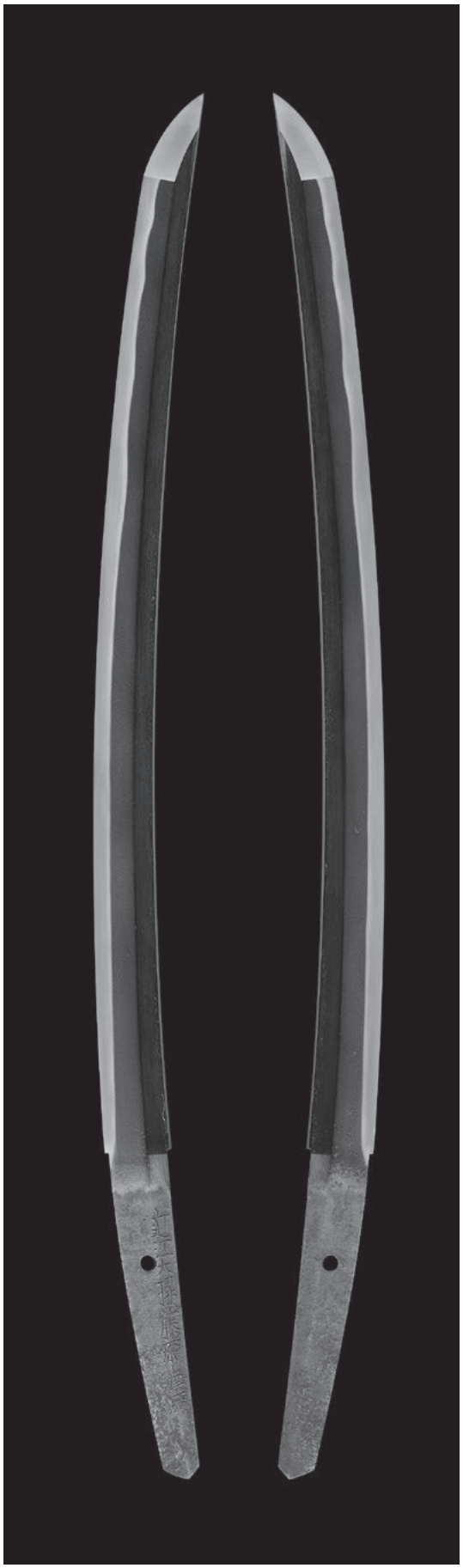
［形状］　鎬造、庵棟、反りやや高く、中鋒。

［地鉄］　小杢目肌がよく詰み、地沸がこまかくつき、地景が交じる。

［刃文］　中直刃に物打ちわずかに湾れ、小沸がよくつき、匂口冴えて明るい。

［帽子］　表は二重刃風に、裏はわずかに掃き掛けて小丸に返る。

［茎］　生ぶ、角棟、剣形、切鑢、目釘孔一。

肥前国の忠吉一門は、佐賀藩主鍋島家の御用刀工として、江戸初期から幕末まで代々続く間に数多くの刀工を輩出した。忠廣は初代忠吉の子で、父の没後に若くして本家を継ぎ、寛永一八年に近江大掾を受領した。長命であったため活動期間が長く、肥前の刀工中もっとも多くの作品を残し、優品が多いことでも知られる。

本作は、肥前伝に典型的な見どころが余すところなく発揮されている。均整の取れた刀姿に、地沸が一面について明るく精美な「肥前の小糠肌」と称される地鉄、穏やかな小丸がふくらと平行にはしる肥前帽子、近江大掾忠廣が得意とした匂口深く煙り込むような明るい直刃は、刀工の秀逸な技量を示すものである。